

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04241

研究課題名（和文）自閉症スペクトラム症の子どもと保護者に対するロールプレイテストの開発

研究課題名（英文）Development of a role play test for parents and children of autism spectrum disorder

研究代表者

柴田 貴美子（Shibata, Kimiko）

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：20438873

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：自閉スペクトラム症児の社会的スキルの測定方法には、質問紙、面接法、行動観察法、ロールプレイ法がある。ロールプレイ法は、社会的状況の把握、処理および問題解決技能、表情や声の大きさといった表出された行動を評価できるが、標準化が困難であった。そこで、本研究では自閉スペクトラム症児とその親を対象としたロールプレイテストを開発し、その信頼性および妥当性を検討した。その結果、評価者間信頼性は適度に一致しており、構成概念妥当性では、課題の理解と非言語的スキル、目標志向的コミュニケーション、会話への焦点化、主観的評価の4因子が抽出された。基準関連妥当性でも、一部の因子と中等度の相関が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、自閉スペクトラム症児とその親に対し、実際のコミュニケーション場面を用いて社会的スキルを測定する方法を提示した。また、今回開発したロールプレイテストは、受信技能、処理技能、送信技能を包括して測定することが可能であり、自閉スペクトラム症児を対象とした社会生活スキルトレーニングの効果指標として寄与できると考える。

研究成果の概要（英文）：The methods used to measure social skills in children with autism spectrum disorder include questionnaires, interviews, behavioral observation, and role play test. The role play test is capable of assessing social situation understanding, processing and problem-solving skills, and expressed behaviors such as facial expressions and loudness of voice, but it is difficult to standardize the method. Therefore, the present study developed a role play test for children with autism spectrum disorder and their parents, and examined its reliability and validity. The results showed that inter-rater reliability was reasonably consistent, and four factors were extracted for construct validity: task comprehension and nonverbal skills, goal-oriented communication, focus on conversation, and subjective evaluation. Criterion-related validity also showed moderate correlations with some of the factors.

研究分野：精神保健福祉

キーワード：自閉スペクトラム症 ロールプレイテスト 親子 ソーシャルスキル

### 1. 研究開始当初の背景

発達障害の中でも自閉スペクトラム症(以下, ASD)は, 社会的コミュニケーションおよび対人相互交流が障害され, 社会的スキルが乏しいことが指摘されている(Church et al, 2000). ASD の有病率は 2.64%と報告され, その 7 割以上が通常学級に在籍している(Kim et al, 2011). 我が国の調査でも, 知的発達に遅れのない高機能自閉症は, 通常学級に 1.1%在籍している(文部科学省, 2012). ASD の子どもたち(以下, ASD 児)は, 学校のルールが守れない, 同級生の友だちと遊ぶことができない, 集団遊びについていけない等, 学校で不適応を起こすことが知られている.

ASD 児に対する社会的スキルの学習と向上を目指した支援の一つに, 社会生活スキルトレーニング(以下, SST)がある. ASD 児に対する社会生活スキルトレーニングの効果測定は, 対人応答性尺度などの質問紙を用いていることが多く, 研究によって多様な尺度が用いられている(藤野, 2013; 西方ら, 2018). 専門家が社会的スキルを測定する方法には, 面接法, 行動観察法, ロールプレイ法があり(相川ら, 2005), ロールプレイ法は実際のやりとりから社会的スキルを評価できる. 統合失調症を対象とした改訂版ロールプレイテスト(佐々木, 2006)は, 社会的状況の把握や対処技能も評価していることが特徴である.

### 2. 研究の目的

本研究では, 社会的状況の把握といった受信技能, 対処技能を含めた処理技能, 表情や声の大きさといった送信技能を包括した, ASD 児とその親を対象としたロールプレイテスト(以下, RPTCP)を開発し, その信頼性および妥当性を検討することを目的とする.

### 3. 研究の方法

#### 1) RPTCP の作成

RPTCP で測定する社会的スキルは, Bellack ら(2004)によって基礎的なスキルとされている「うれしい気持ちを伝える」「頼みごとをする」「相手の言うことに耳を傾ける」「不愉快な気持ちを伝える」の4つである. 「相手に話しかけて無難な会話をする」を練習場面として加え, 5つの対人場面を設定した. テスターの役割は, テストの実施方法を口頭で説明し, 場面に関する質問やロールプレイの相手役を行うことに加え, スキルの評価を行うことである.

RPTCP の方法は, 以下の通りである. スキルを測定するための対人場面が描かれたイラストを提示し, IC レコーダーを用いて教示する. テスターが口頭でその場面の状況についていくつか質問し, その場面の目的を説明した後, テスターが相手役となりロールプレイを行う. ロールプレイ後は, テスターが口頭で自己評価などを質問する. 練習場面を用いてこの一連の流れを練習した後, 4つの社会的スキルを測定する. RPTCP の様子はビデオ撮影し, ビデオを見ながら RPTCP 評価表を用いて評価を行う.

RPTCP を ASD 児とその親 2 組に実施し, 教示方法と RPTCP 評価表を再検討し修正を加えた. 最終的に, RPTCP 評価表は佐々木(2006)の改訂版ロールプレイテストの他に社会交流技能(Fisher AG, 2010), 目標スキルの児童自己評価尺度(藤枝・相川, 2001)を参考にし, 20 項目, 5 件法の評価表を作成した. RPTCP 評価表は児童も親も同様のものを使用するが, 親の場合は ASD に特化した項目を除く 13 項目とした.

表 1 対象者のプロフィール

	n	M (SD)	Range
<b>子ども</b>			
年齢(年)	21	8.9 (1.4)	7-11
男	20		
女	1		
<b>診断名</b>			
自閉スペクトラム症*1	15		
注意欠如多動症	3		
広汎性発達障害	2		
診断なし	1		
IQ *2		99.9 (15.0)	80-122
<b>小学校</b>			
通常学級	13		
特別支援学級	7		
不登校	1		
<b>保護者</b>			
年齢(年)		42.3 (6.8)	29-52
母親	21		

\*1: 注意欠如多動症(3名), 軽度知的障害(1名)を合併している者を含む

\*2: WISC- (15名), WISC- (1名), 新版K式(1名), 田中ビネー (4名)

#### 2) RPTCP の信頼性と妥当性の検証

対象は, 同意が得られた小学 2 から 6 年生の発達障害児 21 名とその親 21 名である(表 1). 対象児には RPTCP, 小学生用社会的スキル尺度(以下, SS)を実施し, 対象児の親には RPTCP, 親面接式自閉スペクトラム症評定尺度(以下, PARS-TR), 日本版 SRS-2 対人応答性尺度(以下, SRS-2), 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(以下, 成人 SS)を実施した.

RPTCP の信頼性は, 評価者間信頼性を検証した. 3 名の評価者が RPTCP 評価表を用い, それぞれ独立して評価し, ランダムに抽出した発達障害児 10 名分について Fleiss のカッパ係数を算出した. RPTCP の妥当性は, 構成概念妥当性と基準関連妥当性を検証した. 構成概念妥当性は, 評価項目の因子分析を行った. 基準関連妥当

性は児童と親のそれぞれについて算出し、児童の場合は RPTCP 評価表の因子と SS, PARS-TR ( 児童期得点 ), SRS-2 における 5 つの治療下位尺度との相関係数を算出した。親の場合は、RPTCP 評価表の各因子と成人 SS の相関係数を算出した。

#### 4. 研究成果

RPTCP の評価者間信頼性について、主観的評価を除く RPTCP 評価表 18 項目のカッパ係数を算出した結果、 $\kappa = 0.24 \sim 0.76$  と適度に一致していた。

構成概念妥当性について、20 評価項目の因子分析を行った結果、4 因子が抽出された(表 2)。第 1 因子は視線、表情、声の変化、手遊び、身体の向き、移動と姿勢の変換、教示の理解、目的の理解の 8 項目を含む「課題の理解と非言語的技能」、第 2 因子は相手の認知、検査者からの問いかけに自ら応じる、スキルの実施状況、目的の達成、対処法の枠組みを提案する、対処法のバリエーションの 6 項目を含む「目標志向的コミュニケーション」、第 3 因子は設問内容を復唱する、独り言を話す、会話のキャッチボール、会話の内容の 4 項目を含む「会話への焦点化」、第 4 因子は自己効力感と不安感の 2 項目を含む「主観的評価」であった。

基準関連妥当性について、児童の場合は、第 3 因子のみ PARS-TR ( $r = .49, p < .05$ ), SRS-2 の下位尺度である社会的認知 ( $r = .34, p < .05$ ) と社会的コミュニケーション ( $r = .46, p < .05$ ) に正の相関が認められた。親の場合は、第 4 因子のみ成人 SS と正の相関 ( $r = .36, p < .05$ ) が認められた。

本研究で得られた因子構造は、佐々木 (2006) が開発した改訂版ロールプレイテストと同様、4 因子という結果となった。しかし、改訂版ロールプレイテストの因子は、総合的スキル、主観的評価、場所と相手の認知、対処法の起案という 4 因子であり、本研究で得られた 4 因子のうち主観的評価のみ一致する結果となったが、疾患の特異性を示しているかについては今後検討を要するものとする。

本研究の限界として、サンプル数が少ないため得られた結果に制約が伴うことが挙げられる。また、RPTCP の実施と評価に労力と時間がかかるため、RPTCP の有用性についての検証も必要と思われる。

表 2 因子負荷量

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
身体の向き	0.855	0.292	0.136	0.339
移動、姿勢の変換	0.83	0.286	0.093	0.312
表情	0.793	0.302	0.364	0.137
視線	0.786	0.239	0.467	0.218
手遊び	0.74	0.51	0.257	0.024
声の変化Rp	0.632	0.373	0.551	-0.021
教示の理解	0.599	0.519	0.166	0.115
目的の理解	0.593	0.38	0.386	0.111
スキルの実施状況	0.458	0.75	0.334	0.191
相手の認知	0.348	0.711	0.26	0.247
対処法の枠組みを提案できる	0.407	0.632	0.017	0.005
第一声を自ら発することができる	0.45	0.624	0.579	0.026
目的の達成	0.539	0.568	0.455	0.261
対処法の修正	0.084	0.448	0.127	0.101
設問内容を復唱する	0.071	0.247	0.915	0.071
独り言を話す	0.339	0.002	0.799	0.386
会話のキャッチボール	0.414	0.522	0.655	0.141
会話の内容	0.526	0.493	0.632	0.177
自己効力感	0.317	0.372	0.006	0.823
不安感	0.107	0.034	0.259	0.815

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 柴田貴美子, 西方 浩一, 安西 信雄	4. 巻 5
2. 論文標題 発達障害児とその親を対象としたSSTプログラムの有用性 : 親子SSTプログラム開発のための予備的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 557-563
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibata Kimiko, Nishikata Hirokazu, Kawabata Sayoko, Miyadera Hiroko, Kuriki Yohei	4. 巻 17
2. 論文標題 Effectiveness of the Parent-Child Social Skills Training Program for Children with Developmental Disorders: A quasi-experimental design	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Asian Journal of Occupational Therapy	6. 最初と最後の頁 37 ~ 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11596/asiajot.17.37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 柴田貴美子, 西方浩一
2. 発表標題 社会的スキルの評価 ロールプレイテストの文献レビュー
3. 学会等名 第54回日本作業療法学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hirokazu Nishikata, Kimiko Shibata, Yohei Kuriki, Sayoko Kawabata
2. 発表標題 Development of a Role Play Test for Children with Autism Spectrum Disorder and their Parents
3. 学会等名 The 12th International Symposium of Health Sciences - UKM (i-SIHAT 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田貴美子, 西方浩一, 川端佐代子, 嶋崎寛子, 栗城洋平
2. 発表標題 親子SSTプログラムが生活にもたらす影響
3. 学会等名 第53回日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田貴美子
2. 発表標題 親子SSTプログラムの実践報告
3. 学会等名 SST普及協会第24回学術集会サテライト研修(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田貴美子, 西方浩一, 栗城洋平
2. 発表標題 統合失調症者に対するソーシャルスキルの評価
3. 学会等名 第52回日本作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西方浩一, 柴田貴美子, 栗城洋平
2. 発表標題 子どもを対象としたソーシャルスキルプログラムにおける評価指標の検討
3. 学会等名 第52回日本作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柴田貴美子, 西方浩一, 栗城洋平
2. 発表標題 自閉スペクトラム症の子どもと保護者に対するロールプレイトスト評価表の開発
3. 学会等名 SST普及協会第23回学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 伊藤英夫、工藤秀機、石田行知	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文京学院大学総合研究所	5. 総ページ数 304
3. 書名 対人援助のためのコミュニケーション学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西方 浩一  (Nishikata Hirokazu)  (00458548)	学校法人文京学院 文京学院大学・保健医療技術学部・教授   (32413)	
研究分担者	栗城 洋平  (Kuriki Youhei)  (20772966)	学校法人文京学院 文京学院大学・保健医療技術学部・助教   (32413)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------